

11:1 すると、神はご自分の民を退けてしまわれたのですか。絶対にそんなことはありません。この私もイスラエル人で、アブラハムの子孫に属し、ベニヤミン族の出身です。

11:2 神は、あらかじめ知っておられたご自分の民を退けてしまわれたのではありません。それともあなたがたは、聖書がエリヤに関する個所で言っていることを、知らないのですか。彼はイスラエルを神に訴えてこう言いました。

11:3 「主よ。彼らはあなたの預言者たちを殺し、あなたの祭壇をこわし、私だけが残されました。彼らはいま私のいのちを取ろうとしています。」

11:4 ところが彼に対して何とお答えになりましたか。「バアルにひざをかがめていない男子七千人が、わたしのために残してある。」

11:5 それと同じように、今も、恵みの選びによって残された者がいます。

11:6 もし恵みによるのであれば、もはや行いによるものではありません。もしそうでなかったら、恵みが恵みでなくなります。

11:7 では、どうなるのでしょうか。イスラエルは追い求めていたものを獲得できませんでした。選ばれた者は獲得しましたが、他の者は、かたくなにされたのです。

11:8 こう書かれていますとおりです。「神は、彼らに鈍い心と見えない目と聞こえない耳を与えられた。今日に至るまで。」

11:9 ダビデもこう言います。「彼らの食卓は、彼らにとってわなとなり、網となり、つまずきとなり、報いとなれ。」

11:10 その目はくらんで見えなくなり、その背はいつまでもかがんでおれ。」

11:11 では、尋ねましょう。彼らがつまづいたのは倒れるためなのでしょう。絶対にそんなことはありません。かえって、彼らの違反によって、救いが異邦人に及んだのです。それは、イスラエルにねたみを起こさせるためです。

11:12 もし彼らの違反が世界の富となり、彼らの失敗が異邦人の富となるのなら、彼らの完成は、それ以上の、どんなにかすばらしいものを、もたらすことでしょう。

11:13 そこで、異邦人の方々に言いますが、私は異邦人の使徒ですから、自分の務めを重んじています。

11:14 そして、それによって何とか私の同国人にねたみを引き起こさせて、その中の幾人でも救おうと願っているのです。

11:15 もし彼らの捨てられることが世界の和解であるとしたら、彼らの受け入れられることは、死者の中から生き返ることではなくて何でしょう。

11:16 初物が聖ければ、粉の全部が聖いのです。根が聖ければ、枝も聖いのです。

11:17 もしも、枝の中のあるものが折られて、野生種のオリーブであるあなたがその枝に混じってつがれ、そしてオリーブの根の豊かな養分をともに受けているのだとしたら、

11:18 あなたはその枝に対して誇ってはいけません。誇ったとしても、あなたが根をささえているのではなく、根があなたをささえているのです。

11:19 枝が折られたのは、私がつぎ合わされるためだ、とあなたは言うでしょう。

11:20 そのとおりです。彼らは不信仰によって折られ、あなたは信仰によって立っています。高ぶらないで、かえって恐れなさい。

11:21 もし神が台木の枝を惜しまれなかったとすれば、あなたをも惜しまれないでしょう。

11:22 見てごらんください。神のいつくしみときびしさを。倒れた者の上にあるのは、きびしさです。あなたの上にあるのは、神のいつくしみです。ただし、あなたがそのいつくしみの中にとどまっていればであって、そうでなければ、あなたも切り落とされるのです。

11:23 彼らであっても、もし不信仰を続けなければ、つぎ合わされるのです。神は、彼らを再びつぎ合わすことができるのです。

11:24 もしあなたが、野生種であるオリーブの木から切り取られ、もとの性質に反して、栽培されたオリーブの木につながるのであれば、これらの栽培種のは、もっとたやすく自分の台木につながれるはずで。

11:25 兄弟たち。私はあなたがたに、ぜひこの奥義を知っていただきたい。それは、あなたがたが自分で自分を賢いと思うことがないようにするためです。その奥義とは、イスラエル人の一部がかたくなになったのは異邦人の完成のなる時までであり、

11:26 こうして、イスラエルはみな救われる、ということです。こう書かれているとおりに。「救う者がシオンから出て、ヤコブから不敬度を取り払う。

11:27 これこそ、彼らに与えたわたしの契約である。それは、わたしが彼らの罪を取り除く時である。」

11:28 彼らは、福音によれば、あなたがたのゆえに、神に敵対している者ですが、選びによれば、父祖たちのゆえに、愛されている者なのです。

11:29 神の賜物と召命とは変わることがありません。

11:30 ちょうどあなたがたが、かつては神に不従順であったが、今は、彼らの不従順のゆえに、あわれみを受けているのと同様に、

11:31 彼らも、今は不従順になっていますが、それは、あなたがたの受けたあわれみによって、今や、彼ら自身もあわれみを受けるためなのです。

11:32 なぜなら、神は、すべての人をあわれもうとして、すべての人を不従順のうちに閉じ込められたからです。

11:33 ああ、神の知恵と知識との富は、何と底知れず深いことでしょう。そのさばきは、何と知り尽くしがたく、その道は、何と測り知りがたいことでしょう。

11:34 なぜなら、だれが主のみこころを知ったのですか。また、だれが主のご計画にあずかったのですか。

11:35 また、だれが、まず主に与えて報いを受けるのですか。

11:36 というのは、すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至るからです。どうか、この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。

はじめに

これまでのイスラエルに関するシリーズ説教では、神がアブラハムとその子孫に与えられた約束について学んできました。

これは、預言者たちやイエスご自身によって支持されています。イエスは、ヨシヤが約束の地の征服に着手する前に、ヨシヤの前に姿を現されました。そして、ローマ 9-10 章の学びでは、イスラエルが福音を拒んだのは、イエスとその十字架上の御業を信じるのを拒んだことが要因の一部であったことがわかりました。

また同時に、異邦人に恵みとあわれみを差し伸べる神のご計画の一部でもありました。

イエスは、ユダヤ人にとってはつまずきでした。

しかし、ユダヤ人は少なくとも、神に受け入れていただく必要性を知っていました。ただ、その方法が間違っていたのです。

彼らは、神の恵みではなく、神の律法を頼みにしていました。

今日は、イスラエルの民が福音を拒んだことについて語るパウロの結論を学びます。このシリーズは今日で終えて、次の 2 週は OIC の皆さんへのお別れメッセージを 2 回に分けてお話することにしました。

祈って考えた結果、イスラエルの未来に関する黙示録およびその他の預言を理解するには、一度のメッセージでは十分ではないと感じました。そして、何よりも大切なメッセージを皆さんに残すことが重要だと感じました。それは、イエスが弟子たちに遺されたメッセージです。つまり、マタイの福音書 28 章 16-20 節にある大宣教命令です。

ローマ 11 章から、神がご自身の民であるイスラエルを救う未来のご計画を持っておられることは明らかです。

今日の個所はふたつに分けて学びましょう。

前半はイスラエルの現状の大筋、後半は未来に向けた神のご計画です。

イスラエルの民が教会に取って代われ、選民に対する神の目的や計画は終わったと思っているクリスチャンにとっては、今日の聖書箇所はいろいろと考えさせられる内容が含まれています。私たちはここに書かれた神のみことばを素直に信じましょう。神がそのご計画をどのように成就されるか、成就されるタイミングはいつか、等について考え過ぎないようにしましょう。それは神にお任せすればよいのです。

1. イスラエルの現状 (1-10 節)

1 節でまず、パウロが問いかけています。「神はご自分の民を退けてしまわれたのですか。」そして、「絶対にそんなことはありません。」と断言します。

パウロは詩篇 94 : 14 の「まことに、【主】は、ご自分の民を見放さず、ご自分のものである民を、お見捨てになりません。」というみことばを思い出していたのでしょうか。

パウロは、4 つの根拠を挙げて説明します。

その根拠は次のとおりです。

a) 実体験による根拠

パウロは、神がご自身の民を見捨てておられない根拠として、ユダヤ人である自分を挙げました。

パウロは教養があり、いくつもの言語を話し、優秀な指導者のもとで訓練を受けた人でしたが、クリスチャンの信徒を迫害し、ステパノが石打ちされる現場にいました。

神がご自身の民をお見捨てになるなら、パウロのこともお見捨てになったでしょう。

b) 神学的根拠

ふたつめの根拠は、神学的根拠です。

パウロは、「神の予知」について語ります。

「神の予知」とは、神が過去に主権をもって、イスラエルの民を救うことを選択されたという意味です。

「知る」という動詞は、神の選びを指します。

これは、イスラエルの民が神に選ばれるにふさわしいと認められるような行動を起こしたり身分になったりする以前に、神がイスラエルを選ばれたことを強調します。

つまり、神がイスラエルの民を選ばれたのは、彼らの適正とは無関係だということです。ここでパウロが提起しているのは、「神が祝福すると主権をもって選ばれた民を拒絶されるだろうか」という問いです。

それはあり得ないことです。ここでパウロは、私たちが考えるべき非常に重要なポイントをつけています。

c) 聖書的根拠

パウロは、自身の主張について旧約聖書から根拠を挙げます。

その中で、エリヤの話に焦点を当てます。

エリヤの登場する話についてもう少し理解するために、旧約聖書の箇所を読みましょう。

列王記第一 19 章

19:1 アハブは、エリヤがしたすべての事と、預言者たちを剣で皆殺しにしたこととを残らずイゼベルに告げた。

19:2 すると、イゼベルは使者をエリヤのところに遣わして言った。「もしも私が、あすの今ごろまでに、あなたのいのちをあの人たちのひとりのいのちのようにならなかったなら、神々がこの私を幾重にも罰せられるように。」

19:3 彼は恐れて立ち、自分のいのちを救うため立ち去った。ユダのベエル・シェバに来たとき、若い者をそこに残し、

19:4 自分は荒野へ一日の道のりを入れて行った。彼は、えにしだの木の陰にすわり、自分の死を願って言った。「【主】よ。もう十分です。私のいのちを取ってください。私は先祖たちにまさっていませんから。」

19:5 彼がえにしだの木の下で横になって眠っていると、ひとりの御使いが彼にさわって、「起きて、食べなさい」と言った。

19:6 彼は見た。すると、彼の頭のところに、焼け石で焼いたパン菓子一つと、水の入ったつぼがあった。彼はそれを食べ、そして飲んで、また横になった。

19:7 それから、【主】の使いがもう一度戻って来て、彼にさわって、「起きて、食べなさい。旅はまだ遠いのだから」と言った。

19:8 そこで、彼は起きて、食べ、そして飲み、この食べ物に力を得て、四十日四十夜、歩いて神の山ホレブに着いた。

19:9 彼はそこにあるほら穴に入り、そこで一夜を過ごした。すると、彼への【主】のことばがあった。主は「エリヤよ。ここで何をしているのか」と仰せられた。

19:10 エリヤは答えた。「私は万軍の神、【主】に、熱心に仕えました。しかし、イスラエルの人々はあなたの契約を捨て、あなたの祭壇をこわし、あなたの預言者たちを剣で殺しました。ただ私だけが残りましたが、彼らは私のいのちを取ろうとねらっています。」

19:11 【主】は仰せられた。「外に出て、山の上で【主】の前に立て。」すると、そのとき、【主】が通り過ぎられ、【主】の前で、激しい大風が山々を裂き、岩々を砕いた。しかし、風の中に【主】はおられなかった。風のあとに地震が起こったが、地震の中にも【主】はおられなかった。

19:12 地震のあとに火があったが、火の中にも【主】はおられなかった。火のあとに、かすかな細い声があった。

19:13 エリヤはこれを聞くと、すぐに外套で顔をおおい、外に出て、ほら穴の入口に立った。すると、声が聞こえてこう言った。「エリヤよ。ここで何をしているのか。」

19:14 エリヤは答えた。「私は万軍の神、【主】に、熱心に仕えました。しかし、イスラエルの人々はあなたの契約を捨て、あなたの祭壇をこわし、あなたの預言者たちを剣で殺しました。ただ私だけが残りましたが、彼らは私のいのちを取ろうとねらっています。」

19:15 【主】は彼に仰せられた。「さあ、ダマスコの荒野へ帰って行け。そこに行き、ハザエルに油をそそいで、アラムの王とせよ。

19:16 また、ニムシの子エフィーに油をそそいで、イスラエルの王とせよ。また、アベル・メホラの出のシャファテの子エリシャに油をそそいで、あなたに代わる預言者とせよ。

19:17 ハザエルの剣をのがれる者をエフィーが殺し、エフィーの剣をのがれる者をエリシャが殺す。

19:18 しかし、わたしはイスラエルの中に七千人を残しておく。これらの者はみな、バアルにひざをかがめず、バアルに口づけしなかった者である。」

19:19 エリヤはそこを立って行って、シャファテの子エリシャを見つけた。エリシャは、十二くびきの牛を先に立て、その十二番目のくびきのそばで耕していた。エリヤが彼のところを通り過ぎて自分の外套を彼に掛けたので、

19:20 エリシャは牛をほうっておいて、エリヤのあとを追いかけて行って言った。「私の父と母とに口づけさせてください。それから、あなたに従って行きますから。」エリヤは彼に言った。「行って来なさい。私があなたに何をしたというのか。」

19:21 エリシャは引き返して来て、一くびきの牛を取り、それを殺し、牛の用具でその肉を調理し、家族の者たちに与えてそれを食べさせた。それから、彼は立って、エリヤについて行って、彼に仕えた。

エリヤは、イスラエルで神に従っているのはもう自分だけだと思っていきましたが、エリヤと同じく聖書の神に忠実な人がまだ 7,000 人いると神はおっしゃいました。これはとても興味深い個所です。というのも、神の残された民に関する教えは、イザヤの時代までありませんでした。これは、イザヤの時代よりも約 100 年前です。神はイスラエル史上一貫してご自身の残された民を守っておられるということです。そして、ご自身の民であるイスラエルにリバイバルの祝福を注がれるまで、この守りは続くでしょう。

d) 現状からの根拠

パウロの4つめの根拠は、恵みによって選ばれた事実を照らし、神の残された民の現状に言及します。

5節にそのことが示されています。エリヤの時代に7,000人のユダヤ人が忠実であったように、パウロの時代にも、神のみことばを尊ぶ忠実なユダヤ人がいました。

当時、ユダヤ人信徒はたくさんいました。初代教会時代、ほぼ全員がユダヤ人でした。

恵みとは、受けるにふさわしくない人に対する神の慈悲深い親切です。

6節で、パウロは自身の教える内容を明確に示しました。

ローマ 11:6

11:6 もし恵みによるのであれば、もはや行いによるものではありません。もしそうでなかったら、恵みが恵みでなくなります。

パウロは7-10節で、なぜ少数のユダヤ人だけが神の恵みを受け入れたのかを説明します。7節には、神に選ばれた人は神の恵みを受けましたが、それ以外の人には心を閉ざされたことがあります。

パウロはその根拠として、みことばを挙げます。

イザヤ書 29:10、申命記 9:3-4、詩篇 69:22-23 です。

8節は、申命記 29:2 と詩篇 69:22-23 の両方からの引用です。

申命記 29:2 でモーセは、イスラエルの民が神の不思議な業を目撃したけれど、それを理解する心や見る目、聞く耳を神がお与えにならなかったと語ります。

パウロは、神がユダヤ人を霊的に無感覚にされたことを証明するためにイザヤ書から引用しました。

そのような神のさばきがくだったのは、最初に人々が要因を作ったからです。

さらに、その状態は今も続いている、とパウロは続けます。

次に引用されているのは、詩篇 69 篇です。ここでは、正しい人が迫害を受けることが描かれています。

イエスもご自身にこの個所をあてはめられました。

(「彼らは理由なしにわたしを憎んだ」ヨハネ 15:25)

この描写を解釈して理解するのは簡単ではありません。

しかし、「食卓」というのは安全のしるしです。

「その背は…かがんで」というのは、重荷を負う象徴です。

このふたつのしるしを合わせて考えると、神に選ばれた民イスラエルは、自分たちは安泰だと思っていましたが、その安心感が彼らのつまずきとなって、国全体を苦しめる要因になったということです。

現代の歴史において過去 100 年を見ても、この内容がイスラエルの民に実現したことはすぐにわかります。

2. イスラエルのための神の将来計画 (11-32 節)

ここからは、イスラエルにとって良い知らせです。

パウロは 11-32 節で、神がイスラエル民族と国のために将来計画をお持ちだと教えます。

そして、その内容と、その計画が現時点では先延ばしにされている理由について語ります。

a) 異邦人への現在の祝福

パウロは 11 節で、「彼らがつまずいたのは倒れるためなのではないでしょうか。」と再度尋ねます。

そして、自らそれに答えて、「絶対にそんなことはありません。かえって、彼らの違反によって、救いが異邦人に及んだのです。それは、イスラエルにねたみを起こさせるためです。」と言います。(11 節)

パウロは、神の将来計画の第一段階は異邦人の祝福だと言っているのです。神がそのようにご計画なさいました。
ユダヤ人が神の新しい契約を受け入れなかった民族としての過ちが、異邦人の世界に祝福をもたらしたのです。
パウロは、異邦人の世界に福音を告げ知らせるために神に選ばれました。
ですから、今まで続いている異邦人に対する祝福の理由について誰よりも知っているはずで

b) 国および神の選民としてイスラエルが受ける未来の祝福 (15-36 節)

15-36 節でパウロは、イスラエルの民と彼らの未来に関する全体像を説明します。
まず、15 節で自分の考えをとともうまく表現しています。

ローマ 11 : 15

11:15 もし彼らの捨てられることが世界の和解であるとしたら、彼らの受け入れられることは、死者の中から生き返ることではなくて何でしょう。

神がイスラエルの民と選ばれた人々に救いを与えて祝福し始められると、まるで死者がよみがえったように見えるといいます。
現在の神の民、つまりユダヤ民族の大半は、霊的に死んだ状態です。しかし、未来のいつかの時点で、彼らは霊的に生き返ります。
それは世界史上もっとも素晴らしい奇跡となるでしょう。
人に起こり得るもっとも素晴らしい奇跡は、生まれ変わって神の聖霊をいただき、神の子となることです。
ですから、不従順だったユダヤ人が神の子となるのは、それ以上の奇跡です。
大勢のユダヤ人が救われ、新生することは、史上最大のリバイバルです。
そして、これはいつか必ず起こります。それがいつ起こるかは気にする必要はありません。

自然界からのたとえ

パウロは、自然界のたとえを用いて説明します。
オリーブの木を例に挙げたのは、数百年も生き延び、根が非常に長く伸びる木だからかもしれません。
オリーブの木はイスラエル全域の森や果樹園で栽培されています。オリーブの枝はイスラエルの国章にも採用されています。

エレミヤ書 11 : 16

11:16 【主】はかつてあなたの名を、『良い実をみのらせる美しい緑のオリーブの木』と呼ばれたが、大きな騒ぎの音が起こると、主はこれに火をつけ、その枝を焼かれる。

ホセア書 14 : 6

14:6 その若枝は伸び、その美しさはオリーブの木のように、そのかおりはレバノンのようになる。

しかしここでパウロが木の育て方を教えているのではないことを認識しておく必要があります。これは、霊的な教えです。
オリーブの木を栽培する農家の人は、通常、特別な理由がない限り、果樹園のオリーブの木に野生のオリーブの枝を接木することはありません。
栽培されたオリーブの木には栽培されたオリーブの枝を接ぎます。
しかしここでパウロは、通常の栽培方法の例外を教えます。それは、次のとおりです。

1. 栽培されたオリーブの木とは、神の民、神に選ばれた人々、アブラハムの子孫です。その幹は、何世紀にもわたって続いてきた神の選びの民を象徴します。

2. 折られた枝 とは一時的に捨てられた状態にある信仰のないユダヤ人を象徴します。
3. 野生種のオリーブの枝 とは良いオリーブの木に接木された異邦人を象徴します。

神が野生種のオリーブの枝を栽培されたオリーブの木に接木された、とパウロは言っているわけです。これは、通常の栽培方法ではありません。

1905年に、化学者ウィリアム・ラムゼー卿は、興味深い記事を書き、その内容は現在に至るまで引用されています。

彼は、古代農法と現代農法の両方の歴史から情報を得て、次のように語ります。

「イスラエルでは例外的な状況で、パウロの説明した方法が今も用いられている。今も昔も、実をつけなくなったオリーブの木に野生種の枝を接ぐことで、木の再活性をはかる習慣がある。そうすることで、樹液が野生種の枝を生かし、木が実をつけられるようになるのである。」

(1905年、ホダー・アンド・スタウトン社、W.ロバートソン・ニコル編エキスポジター第6シリーズ、第11巻の記事より)

ですから、パウロがここで語っているのは、オリーブの若木を接木する通常の方法ではなく、不健康で弱ったオリーブの木を活性化する方法だということがわかります。

この場合、接木ではなく属性が不自然ということです。

枝はもともとの野生種のオリーブの木に属していました。しかし、もともと属していなかった栽培されたオリーブの木に接木されました。

なぜパウロはこのような例を挙げたのでしょうか。

ここで非常に重要な事柄をふたつ教えるためです。

1. 異邦人の信徒たちが、自分たちの立場を誇ったり、当たり前だと思ったりしないようにという警告。
2. 信仰を持っていないイスラエル人、ユダヤ人がいずれ回復されるという約束。

このふたつについてももう少し考えてみましょう。

1. 異邦人信徒への警告

ここで警告されているのは、異邦人が自分の立場を誇らないことです。

オリーブの木は、剪定と接木を経験しています。

オリーブの木から折られた枝もあります。それは、退けられたユダヤ人を象徴します。その代わりに、野生種の枝が接木されました。

つまり、異邦人が神の契約の民に迎え入れられたのです。

異邦人は、根に支えられているとあります。それは、枝自体に命はないからです。

18節に、異邦人が根を支えているのではないとあります。根とは、神の選民イスラエルのことで、その根が異邦人を支えているのです。

言い換えると、異邦人はイエスのみを救いと信じる信仰によって立っていることだけが頼みです。

つまり、異邦人が神の恵みを受けるのは、ユダヤ人が将来のいつか大規模なリバイバルで神のもとに立ち返るまでのことです。

異邦人の時は限られているとあります。(25節) 神の異邦人に対する恵みは、将来のいつか期限切れとなります。

2. ユダヤの民と国に対する約束

26節に、イスラエルはいずれ、みな救われるという約束があります。

この言葉は、聖書学者や神学者の間で常に論争を起こしてきました。私自身はこれを文字通り受け取っています。神が聖書で何かを明らかにされたら、それを複雑化しないようにすべきだからです。

誰も滅びず、すべての人がイエスを信じて救われることが神のみこころであることはわかっています。

また、天からリバイバルが起こされるのは神の聖霊の御業だということもわかっています。

ですから、未来のいつの日か、イエスの再臨の時かその直前に、神が救おうと決めておられるユダヤ人を全員救われることにまったく疑いがありません。

神が「みな」と言われたのですから、「みな」を指しておられるのです。

これで、神の選民のために立てられた神のご計画に関する 3 回のシリーズ説教を終わります。この内容が皆さんのお役に立てたことを願います。

来週からは、私の最後の説教となる 2 週連続の説教をマタイの福音書 28 : 16-20 から語ります。